

今日があることがとても貴重

「余命宣告 12 か月。はっきり言って治す方法はありません」と言われたら私たちはその後の人生をどう生きるでしょうか。諦め。医師にすがる。自分で治療法を探す。その後の生き方で人生が変わるのを教えてくれた方がいます。夏まつりで講演をして下さった東京にある「サーモセルクリニック」の先生からある患者さんを知ることができました。竹屋陶板浴にも来て下さった方です。野中秀訓さん。まさに余命宣告をされました。大腸癌ステージ 4 の末期、治療法は無いと言われましたが何か方法はあるのではないかと治療法を探し、一年後に生還した方です。主婦の友社から出版された「がんになって、止めたこと、やったこと」陶板浴にも置いてあります。この本を読み、著者である野中秀訓さんの生き方にとっても感銘させられました。自分の生き方に責任をもち、人生を全うする生き方とはこのようなことなのだと教えてくれています。この野中秀訓さんが今年の 11 周年の記念講演会に来て下さることになりました。夏祭りで講演して下さった、奴久妻先生も時間があったら来て下さるとのことです。人との出会いを繋げて下さる方々に感謝の気持ちで一杯です。どんな話が聞けるか楽しみです。

あるお客様が「今日誕生日を無事迎えることができました。これも陶板浴に出会えたから」と言ってくれました。今年の 3 月に医師から余命 3 ヶ月と宣告されたそうです。この期間中に、10 月の誕生日は迎えられないと考えた時期もあったのでしょうか。「今年の誕生日は特別よね」と笑顔で言った言葉が印象的です。生と死を意識するようなことがあると人生をととても大切に充実した生き方をしていような気がします。だから癌交流会などで「私癌になって良かった、いろいろなことに気づき、学べたから」との言葉が発せられるのでしょうか。私もこんな些細なことでもとても恐縮ですが、小説など熱中し読みふけているうち、ページ数が少なくなりそろそろ最後の章に近づいてくると読み進めるのが惜しく、一字一句丁寧に時間をかけ読んでいる自分に気づきます。終わりを意識することは人生において大切なことかもしれませんね。

その点では病気も悪いことだけではないかも知れません。陶板浴に通われていて余命半年と言われたお客様、もう 4 年も元気に過ごし、自分が病気だったのを忘れていないのではないかと思うくらい元気な方もいるのです。誰も人の寿命など測れるものではないと思います。お客さまから「悔いなき人生を歩みなさい、時間を大切に、人に喜ばれるような社会貢献をみなさい」と教えて頂いているようです。

今日があることがとても貴重な事だと考えさせられる 11 周年の取り組みになりそうです。どうぞ皆さんご参加下さい。